

子病闘がん 潤す「わが家」

広島大病院 宿泊施設オープン半年

親との時間 勇気に

小児がん患者に付き添う家族が低料金で泊まれる施設「広島大病院ファミリーハウス」が広島市南区の同病院近くにオープンして半年。中四国などの延べ775人が利用した。病室やアパートなどに寝泊まりしていた親の経済的・精神的な負担を軽減するだけでなく、病氣と闘う子が外泊で家族と触れ合い、つらい治療に立ち向かう原動力になっている。

(鈴木直美)



⑤点滴を受けながら母親の膝上で絵本を読んでもらう男児。付き添う家族にとってファミリーハウスは心強い
⑥ファミリーハウスの多目的ルーム。外泊する子どもの患者が家族と触れ合える「わが家」となる



「息子がうちに帰ってきたようでした」。脳腫瘍で同病院に入院する5歳の男児に初めて外泊許可が出た10月中旬、母親(39)は山口県の自宅から父親(39)と小学3年の兄(9)を呼び、一家でハウスに泊まった。

1カ月ぶりのだんらん。母親は「もう大はしゃぎで。お兄ちゃんにひつついて遊んでいた。見慣れた光景のはずなんだけど、何だかほっとして」と喜んだ。

同病院は中四国9県で唯一の小児がん拠点病院。小児がんは中四国で年約200〜250人が発症し、近年は7割が治るとされる。

だが、抗がん剤治療で数カ月から一年以上にわたる入院は、家族にとっても負担が大きい。自宅が遠い場合、付き添う家族は短期賃貸マンションやアパートを借りるケースも。子どもも移動の疲れや病状の急変が心配され、外泊できないことが多かったという。

大人で1泊1500円のファミリーハウスは5月中

耐えなければならぬ子どもは『治療を頑張つて外泊するんだ』と気持ちが前向きになる」と話す。

脳腫瘍の5歳の男児が外泊を終え病院に戻るとき、母親が「明日から治療だよ」と声を掛けた。すると「おれ、分かつたよ」。母親は「意外な返事に驚いた。一度病院から出ると『もう戻りたくない』と言っつんじやないかと思っていた」という。

子どもの前では笑顔を絶やさない親が、感情を抑えずに泣く場にもなるという。内藤千鶴看護師長は「病状の説明を受けた後などつらい時もある。院内には涙を流す場所もない。お母さんたちが心を静める場が必要ですから」と話している。

◇ 広島大病院はファミリーハウスの運営に充てる寄付を募っている。同病院総務グループ(082(0)57)5007。

クリック

広島大病院ファミリーハウス 全国15カ所の小児がん拠点病院の中で、患者家族が長期滞在できる施設がないのは同病

院だけだった。約2億7千万円をかけ建設し、鉄筋5階建て延べ約5000平方メートル、11部屋ある個室には風呂やキッチンを用意。多目的ルームもあり、家族が食卓を囲んだりくつろいだりできる。